

しあわせと影

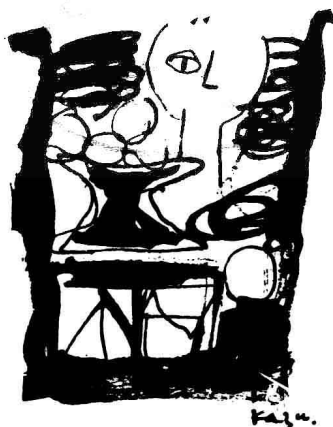
り方教室

大久保 忠利・内山 みち子 編

しあわせと影

——主婦たち・

娘たちのつづり方——



春 秋 社

しあわせと影

＜主婦たち・娘たちのつづり方＞

1959年12月30日 第1刷発行

定価 ㍲ 180

著者との協定に
より検印
廃止に

著者代表 ©

大久保 忠 利
内 山 みち子

東京都千代田区神田宮本町10

発行者

神 田 竜 一

東京都千代田区飯田町1の18

印刷所

日月印刷株式会社

発行所

東京都千代田区 株式 春秋社
神田宮本町10 会社

電話 神田(25)4715, 6575 振替東京24861

(小林製本)

落丁・乱丁本はお取換えいたします。

~~N. D. C. 914~~

まえがき

「書くことが考える力を育てる」

こういう目標で、わたしたちは書きはじめました。わたしたちは五〇代から二〇代にわたる平凡な主婦たち、娘たちです。

書きはじめてから四年という幾人かがもつとも古く、一年にもならない人も幾人かいます。わたしたちは、思ったとおり、感じたとおりをありのままに書くことを、何よりも大切なことだと思つて勉強してきました。ですから、だれも無理して背のびしようとせず、身のまわりのこと、自分の身に起こったことを、ありのままに書きつづりました。ほかの方から見れば何でもないようなことでも、みんなは思い切つて書きました。（事がらにより、ほんの二、三人だけは筆名で書きました。他はすべて本名で書きました。）

わたしたちは、月に一ぺん集まつて、書いたものを持ち寄り、話し合う会をやっています。「日本コトバの会・オトナのつづり方教室」というのがその集まりです。そこでは、毎回、一人か二人

のつづり方を『あゆみ』というガリ版刷りのつづり方集に刷って、考え方や言いあらし方の面から、みんなで話し合います。これを「共同助言」と呼んでおります。この書き・読み・話し合うというやり方でわたしたちは勉強をつづけております。みんな、何だか、考える力・書く力が身についてきたと同時に、生きる自信もついてきたと話し合っています。この集まりには、だれでも出席していただけますから、どうかあなたもいつかおいでください。また、書くことによって全国の婦人がたと結ばれたいとみんな強くねがっております。

このつづり方集は、こうやって編集しました——「オトナのつづり方教室」に前から入っているつぎの五人が編集委員となり、日本コトバの会運営委員の三人が助言者として参加しました。そして、これまでに『あゆみ』や『リレー式、書きなれノート』に書いたものを読み返し、一人に一つずつを選んで、本人によく推考してもらい、清書してもらって原稿にしました。

どうか、お読みになってのご感想を、会あてにお寄せください。どんなにゲキレイとなることでしょう。また、書いた人へのおたよりも会気付くだされば、本人にとりつぎます。本人からご返事をさしあげるはずです。

一九五九・一二・一〇

編集委員　○内山みち子・馬場香夫子・大塚やよい・浦田邦子・高林和子

編集助言者 武藤辰男・○大久保忠利・渡辺武(○印、責任者)

おねがい

なお、全国の婦人たちと手を結び合つての書く集まりを、つぎのように計画しております——仮称『書く婦人の会』。そしてガリ版刷りのつづり方集を発行する予定です。(年二、三回発行、一さつ送料とも一〇〇円以下にするために、およそ一〇〇人の方の参加を待っております)どなたにも参加していただきたいと思っております。賛成の方は、つぎのA・Bいずれかを明記して会あてにハガキをください。

A——つづり方集に原稿を出します。

B——つづり方集を〇〇さつ取ります。

日本コトバの会

東京都目黒区三谷町一一一

振替・東京 一七五九八九番

目次

まえがき

第一部 あすを求めて(九)

- 一 ハイツの一カ月 ……内山みち子(一二)
二 こけし人形 ……武神 千歳(二六)
三 三〇娘 ……吉田美和子(三一)
四 ゆかた ……志村 昭自(三四)
五 生きるということ ……井上美智子(三七)

第二部 女はかくもつつましく(四二)

- 六 平凡な朝 ……高林 和子(四三)
七 プレゼント ……松井 浪子(四七)
八 私のストライキ ……谷村 栄子(五二)
九 言い分 ……藤田 秋子(五九)

一〇	試練の日々	………	黒石はつ子（六六）
一一	ぶどう酒	………	浦田 邦子（七二）
一二	ひとつの心	………	島崎 英子（七七）
一三	母の生きがい	………	井上乃里子（八三）

第三部 世代のひらき（八七）

一四	姑と嫁	………	中野香代子（八九）
一五	ひげ供養	………	大塚やよい（九八）
一六	やがて姑に	………	小林ふく子（一二三）
一七	洗濯機	………	渡辺 武（二一九）
一八	父	………	西野 道子（二二一）

第四部 世の中への目（二二九）

一九	死 霊	………	馬場香夫子（二三一）
二〇	遺 品	………	村田恵美子（二三七）

二一	女性のお茶くみ	………	下田 知江（二四二）
二二	松川裁判に思う	………	須賀 春子（二四五）
二三	私たちが書くようになるまで	………	内山みち子（二四九）
	あとがきに代えて——原稿で読んで——	………	大久保忠利（二五三）

装 釘

兵藤 和男

第一部

あすを求めて

一 ハイツの一カ月

内山 みち子

一

終戦後四年目、私はもう四〇歳になっていた。失業している夫は、ときどきやみやのまねごとなどをしていたが、まだ中学生の二人の子供をかかえての、一家の生活はますます苦しくなるばかりだった。

初夏のある日、私は知人のフランクという二世の世話で、急にハイツの米人宅へ働きに通うことになった。この年になってはじめて外へ出て働く、しかも英語もできない私が、アメリカ人の家に働きに行くなどということは、わらをもつかみたい時でなかったら、とても考えられないことだった。

その家は広いワシントン・ハイツのなかの東北の隅のほうにあった。赤い屋根、白モルタルの二階家で、二階は四つの寝室と浴室、下は居間、食堂、台所、物置きなどだった。

家族はマスターのA氏が極東空軍の将校、その夫人と、一八歳、一六歳、一三歳の三人の娘と、五歳の男児と生後一〇カ月の女兒の七人。ほかに官給のメイドが二人、官給使用人の数はマスターの位できまっているのだ。私はマダムのポケット・マネーで雇われたブライベートのナースメイド（育児係り）だった。その頃マダムは妊娠中だったので、私に生後一〇カ月の女兒の世話をさせる必要があったのだった。

最初の日、私はフランクの車でA家の台所の入口に連れて行かれた。フランクは入口でなかの人に何か言うとすぐに帰ってしまった。私は心細く思いながらオドオドと台所から入って行くと、青色のフチのついたきつねのような形の眼鏡をかけた背の高い日本人の女がいた。右手の指に煙草をはさんでいて、私を見るとフーッと煙をはいてから言った。

「アンタなの？ フランクの紹介で来たって人は、むこうへ行つてマダムと話をきめていらっしゃい」

「英語がわかりませんから、どうぞよろしく」

この女は全然笑い顔をしない。でも声はやさしく、

「ええ、ええ、いいですよ。通訳してあげる」

と言って、マダムと私の話し合いのそばにいてくれた。

私は西洋人をこんなに近くで見たのは生まれてはじめてなので、ヴィナスの彫刻のようにととのった顔や、碧い宝石のようにキラキラ光っている目などがまぶしいようで、マダムをよく見ることができなかった。

マダムは低い軟かい声で英語で言った。日本人の女が通訳してくれた。

「一時間三〇円で、毎日九時から五時まで。昼食つき。仕事はベビイの世話。どう？ あしたから来ますか？」

私は時間給では見当がつかない。トッサに相当多い給料らしいと思ったので、聞きおぼえの英語で、

「オーケイ、オーケイ」

と言った。マダムは満足そうに、にっこりうなずいて、また何か言った。

「アナタのホリデーは（休日）火曜日、どう？」
と言っているようなので、またも私は、

「オーケイ、オーケイ」

と答えた。

そのつぎにマダムがベラベラと言ったことは解らないので、わきにいるきつね眼鏡の顔を見ると、

「給料は円がのぞみか、ドルでほしいかと言ってるのよ」

と言う。私はドルでは使い道もわからないし、金高もよくわからなくて困ると思って、

「円でいただきたいのです」

と言った。きつね眼鏡が通訳した。

そして話は決まった。台所に来て、きつね眼鏡に出された冷たいコーヒーを飲んでみると、台所の入口に、もう一人の、きょう雇い入れられるらしい女が来た。

三〇歳くらいで首から上が厚化粧で、服は紺の仕事着だ。彼女はそこに出てきたマダムに、立ったまま、何か英文の書類を見せて直接交渉である。私のように

「オーケイ、オーケイ」などとは言っていない。

「家族は何人か？ 洗濯は何人分受持つのか？ 使用人は全部で何人か？ ホリデーは何曜日か？」

などと、雇われる方から聞いている。そして話は決まったらしかった。

二

水曜日の朝、私はいつものように居間のマダムの前に行って、

「グッドモーニン、マダム。ハウアーユウ、トウデイ？」

と、きつね眼鏡に教わったあいさつを言った。マダムもいつものように私に、

「サンキュウ、ファイン。アンジウ？」

と、にこにこした。それからそばにいたマスターのA氏に向かって、英語で、

「このレデイはマゴチンのナースメイドです。紹介者はフランクです」

と言った。

A氏は四四、五歳くらいか、赤ら顔の太った男で、映画で見るギャングの親分のようなタイプだけれど、四角い顔はなかなかの好男子だった。このマスター！A

氏は、毎朝九時に出勤、夕方五時に帰宅だったから、私とはちょうど時間がかけ違っていたので、きょうまで私はA氏を見ることはなかったのだ。

若々しいGIカットの髪型もよく似合っていた。緑と黄色の模様のあるアロハシャツの、短かい袖から出た太い腕には、茶色の大きな斑点が沢山あった。私は彼に日本式に一礼をしてから、

「英語がわからなくて困ります」

と、日本語で言った。すると彼は、

「私は日本語がわからなくて困ります」

と英語で言った。そして、さも愉快そうに笑った。

水曜日が彼の休日なのであった。

マダムは映画で見たグリア・ガースンのマダム・キユーリーに似ていた。すらりとした長身、もの静かな態度、大きいはずのおなかもゆったりした妊婦服のおかげで目立たない。髪はゆるく波打った金髪である。英語のわからない私にいつも優しく笑ってみせて、「何も心配ないのよ」と目で話しかけているようにさえ思われた。

あるときマダムは、日本へ来てからもらったといういろいろの物を私に見せた。金色まじりで彩色した鶴の模様のお皿とか、七宝焼の花瓶、塗物のお盆、絞り染のゆかたやたくさんの風呂敷などだった。この家では日本の下駄も珍しい物らしかった。娘たちの机の上には、野球の選手や映画スターの写真のわきに、赤緒をつけた鎌倉彫りのコマ下駄が飾ってあった。その下駄は、あるときA氏が手に持って、「これ、ゲラ、です」と、自慢そうに私に見せたことがある。

娘たちは、上のジョアンも次のパテもブロード、三人目のキャロだけはひぐまのように赤い髪の毛をしていた。みんな海のように碧い目とばら色の頬を持った快活なヤンキー娘。最初の日、私が一つ覚えの英語のあいさつをおそるおそるこの三人の前でやってみた時には、三人とも碧い目を見はってげんそうにじっと私を見おろしていた。が、やがてふき出したいのを我慢したように、そろって目玉をクルッと動かした。私が困ってうつむくと、三人とも太腿もあらわなショート・パンツだから、そこには桜色の太った長い足がず

らりと並んでいた。私は逃げ出したいような気持でその脚を見ていた。緑色のパンツの一番太った娘が、澄んだ声で何かペラペラと言った。これがパテという二番目の娘だった。私は何と言われたのか全然わからない。ただ自分がカラー映画のなかにいるような気がしてボーッとしてしまった。

のちにパテは私と一番親しくなつて、

「わたしはほんととはバトリシアというの。私とキャロはスクール・ガール、ジョアン（上の娘）は極東軍のオフィスガールなの」と言つた。それから、

「うちのママはマーゴ、ベビイはマゴチン、どちらもほんととはマーガレットっていうのよ」

などと教えてくれた。

ある日曜日に、ジョアンのボーイ・フレンドのマックと、隣家のジェッシー姉弟が遊びにきた。A氏夫妻は留守である。この家の三人娘と友人たちとは居間のジュウタンに車座になって、みんながあぐらをかき、みんながタバコをすいながら、カードをやるのである。